(様式4)

富山県教育委員会教育長 殿

令和6年3月15日

富山県立氷見高等学校
校長 藤田 俊英

令和5年度学校総合評価を別紙(様式5)とともに提出します。

令和5年度 学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

今年度、本校では、

- ① 個に応じた学習指導、進路指導のあり方
- ② 学科の専門性の深化、学科間の横断的な学び、生徒の連携・協力の機会の創造
- ③ 社会に貢献し、問題解決能力の高い人物の育成

の3つの学校課題を設定し、別紙(様式5)重点課題に取り組んだ。

- (1) 個に応じた学習指導へ向かうための方策として、生徒・及び教職員が ICT を効果的に活用した学びの機会の創造に取り組んだ。生徒一人一台タブレットの普及もあり、教職員は授業等において ICT 機器の活用頻度が高まってきている。生徒が自ら学ぶ姿勢を身に付けることを目指して、デジタル学習コンテンツを導入し、一部の生徒において教科学習に主体的に取り組む姿勢が生まれ、学習効果を上げている。進路指導では、個に応じた進路指導を目指して「なりたい自分」を見つけ、自らの進路に向けて主体的な進路選択ができるよう、系統的なキャリア学習カリキュラムの確立を目指して指導に取り組んだ。生徒の主体性を育みつつ、本校の強みである教員間の連携を密にして生徒をチームで支援する進路指導体制を活かして、生徒が自己実現を図れるよう一層の努力をしたい。
- (2) 学科の専門性の深化については、各専門学科が各々研究課題をもって取り組み、成果を上げた。特に地域の行政や関係機関、民間事業者と連携しての取り組みは、生徒の学びのモチベーションの向上に大いに役立った。特に、海洋科学科のウニの養殖は、地域の課題解決を図りながら新たな価値を創造するという視点で、大いに注目された。ビジネス科主催のチャレンジショップや農業科学科主催の農産物即売会では、各学科での学びの成果を商品やサービスとして提供し合うなど、専門学科が学科の枠を越えて横断的に協力し合う取り組みが増えてきている。次年度以降も、さらなる学科間連携に向けての準備を進めており、新たな価値創造に向けて、期待されている。
- (3) 令和6年能登半島地震の被災地となった氷見市において、発災直後直ぐに本校が臨時の避難所となった。極度の緊張下で緊急で迅速な対応が求められる中、生徒が主体的に避難所開設や避難誘導に従事したことは、日ごろの探究的な学びで培った「考えて行動する力」との評価もある。地域と協働しての探究学習をとおして、ねらいとする問題発見能力、コミュニケーション能力、主体的に行動する力などをさらに高めていきたい。

7 次年度へ向けての課題と方策

今年度の学校経営計画における学校課題の取り組みに対して、以下の点が課題として次年度以降、改善が求められる。

- (1) ICT デジタル学習コンテンツの活用、「個人差」「学科間の意欲差」があること
 - (2) 教職員の進路指導に対する意識を「時代」にあったものへと教職員の研鑽
 - (3) 学科間の連携を学校全体の課題として、価値を高めていくこと
 - (4) 探究学習を学びのモチベーションへと昇華させること
- その方策として、
- (1) 自学自習のためにデジタル学習コンテンツを活用して「できる価値、喜び」を生徒自身が感じ、さらなる学びの達成感を味わうことができるよう、モチベーション向上プログラムを構築し、実践する。
 - (2) 民間事業者などとの交流や研修をとおして、社会で求められるものについて、積極的に吸収できる機会をより多く創造する。
 - (3) 学科間の連携の価値を象徴する価値としてのシンボルとして、氷見高校ブランドを立ち上げ、そのブランド価値の向上を目指して、学科間で協力する取り組みを創造する。
 - (4) 探究学習での学びを教科学習の学びのモチベーションの向上に繋げる取り組みを一層、進めること。

等が考えられる。

再編統合から14年が経過し、生徒のニーズや時代の変化などに鑑み、より魅力と特長のある学校づくりのため、生徒一人ひとりに応じた指導が求められている。普通科、専門学科各学科のそれぞれ目指す生徒像を教職員が共有し、より有効な手立てを構築するための工夫を続けなければならない。

(様式5)

8 学校アクションプラン

令和5年度 氷見高等学校アクションプラン - 1 -	
重点項目	学習活動（生徒の主体的な学び）
重点課題	ICT活用と地域協働学習による主体的な学びの深化
現 状	<p>(1) ICT活用の推進 Society5.0の時代において求められる資質・能力の向上のため、ICTの環境整備が進められ、学校では教員・生徒一人一台のタブレットが貸与されている。ICTの活用は生徒の「興味・関心を高める」「課題を明確につかむことができる」「図や写真の提示により理解が深まる」「知識の定着が図られる」などの多くのメリットがある。このことから、現在、教育のあらゆる場面においてICTを効果的に活用していくことが求められている。しかし、授業での活用の現状として、指導用PCのプロジェクトへの拡大提示は多教行われているが生徒のタブレット活用は、一部の授業にとどまっている。ICTを用いた協働的な学習や家庭学習における積極的な活用もさらにすすめていきたい。そのためにも、教員側のスキルアップを図り、ICTを活用するスタイルへと積極的に授業改善を行う必要がある。</p> <p>(2) 地域協働学習について 本校では令和2年度より、1年次は「未来講座HIMI学」、2年次は「シチズンシップ」で、氷見市や関係機関及び民間事業者の多くの支援のもと、地域協働学習を進めている。学習指導要領が目指す「生きる力を育む」「学び方を学ぶ」ことを目指し、コンピテンシー（資質・能力）を育成し、社会の変化に対応できる力を身につけさせることをねらいとしている。また、地域と学校が連携することで「本格的な学びの場」を生徒に提供し、協働による学びのシステムを構築しながら地域に開かれた学校づくりを推進し、学校の魅力化につなげようとしている。</p>
達成目標	<p>(1) ①生徒の学習でのICT活用頻度が高まり、より主体的な学びにつながったと感じた生徒の割合を増加させる。</p> <p>②教員のICTを用いた授業頻度を高める。</p> <p>(2) ①地域協働学習により興味を持てることが見つかり、学びのモチベーションが高まったという生徒の割合・・・80%</p> <p>②地域協働学習を支援した講師等、地域の方が、生徒の主体性や協調性などの変化を実感できた割合・・・80%</p>
方 策	<p>(1) ・年2回実施している互研授業週間において、ICTを活用した授業を積極的に参観することで、授業改善を全教員で行う。また、教員のスキルアップのための研修を行うことで、授業での活用頻度を増やしていく。</p> <p>・Google Classroomによる課題提示やスタディサプリ、Classiといったアプリケーションを活用することで、生徒が日常的にICTを活用し、家庭においても能動的に学習を進める習慣づくりを行う。</p> <p>(2) ・学校と地域が一体となって今後も継続できる学びのしくみを構築する。地域協働学習を通して生徒の積極性と探究心を引き出し、学びへの意欲を高められるよう教育地域に開かれた学校を目指す。</p> <p>・「地域の探究実践者と語る」探究とは何かについて大人の実践から理解すると共に地域社会の事象について関心を持つきっかけにする。</p> <p>・「フィールドワーク」調べ学習に終わらないように、実際に地域に出て、地域を知る。</p> <p>・「HIMI学講演会」探究学習と学びのモチベーションとの関連についての講演を聞き、探究学習や日々の学習のモチベーションを高める。</p> <p>・「HIMI学発表会」これまでの気づきや発見、自分の考えをまとめ、自分の言葉で表現することで、これまでの学びに深く関わってきたことを実感する。</p>
達成度	<p>アンケート（6月、1月の2回実施）</p> <p>(1) ①授業でのタブレットの使用（頻繁に使うもしくは時々使う） 84.5%→82.7%</p> <p>家庭でのタブレット等の使用 88.5%→86.8%</p> <p>ICT活用による学習意欲の高まり 82.5%→77.7%</p> <p>②教員のICTを活用した授業の実施 55.2%→63.7%</p> <p>(2) ①地域協働学習により学びのモチベーションが高まったという生徒の割合・・・81.2%</p> <p>②地域協働学習により生徒の主体性や協調性などの学びに対する変化を感じた外部の方々の割合・・・100%</p>
具体的な取組状況	<p>(1) フォームでのアンケートやGoogle Classroomでの課題提示など、頻繁にタブレットを使用させる環境になってきている。ただ、今年度は教員への校内研修を行う機会を設けることができず、外部への研修参加を促すにとどまった。</p> <p>(2) 今年度は地域の方に伴走者として定期的に地域協働学習に参加していただき、より充実した学習を進めることができた。また、1年普通科においては、2年次にも継続して探究学習が行えるカリキュラムへと改善を行った。</p>
評 価	<p>(1) C</p> <p>(2) A</p>
学校関係者の意見	<p>経営管理能力など国際競争力を高めるためのデジタル化、ICT化という価値を教育の力で生徒に伝えてほしい。</p> <p>地域協働学習は生徒にとって学びのモチベーション向上に役立っており、地域の方々からも協働の価値に対して高い評価を受けている様子がうかがえる。</p>
次年度へ向けての課題	<p>(1) 授業におけるタブレットの使用方法を、調べ学習といったインプットのためだけでなく、レポートやPower pointの作成など、より効果的に学習をサポートするツールとして活用できるように授業改善を行ってほしい。</p> <p>(2) 地域協働学習の意義や目指す生徒像をさらに明確にして、地域に触れる時間をより多くもつことで、探究学習と教科学習のつながりを実感させ、主体的に学びを進めることができる生徒を増やしたい。</p>

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：あまり達成しなかった D：達成しなかった）

令和5年度 氷見高等学校アクションプラン -2-			
重点項目	学校生活（心身ともに健康で充実した高校生活）		
重点課題	「誇りに思える氷見高校社会」「安心して過ごせる氷見高校社会」の構築に向けての社会観と健康を大切にすることの意識の育成		
現 状	<ul style="list-style-type: none"> さわやかな挨拶を交し合える学校を目指し、定期的に「あいさつ運動」を行っているが、挨拶の価値を心から意識して行う生徒はまだ少ない。また、制服の着こなしや校内における携帯電話の取り扱いに関しても、一部には意識の低い生徒が見られる。「誇りに思える氷見高校社会」を創造することで、自己有用感を持って学校生活を送ることができるようにする必要がある。 人間関係における不安や悩みは、常に注視すべきことである。「安心して過ごせる氷見高校社会」を生徒と一体となって創造するという視点で、向上に邁進する学校生活を安定して送ることができるようにする必要がある。 一般的に高校へ入学すると、健康診断結果による治療よりも部活動を優先してしまったり、受験時期に治療のタイミングを逃してしまったりするなど健康管理が疎かになる傾向があるため、自立的な健康管理の意識付けを行う必要がある。特に、歯科検診では、本人が不調を感じていない場合に受診せずに済ませてしまい、治療率が向上しない現状がある。 		
達成目標	①挨拶・服装・交通マナー・携帯電話の取り扱い等の規範意識の向上 生徒意識調査における挨拶や服装等に係る意識率95%以上	②いじめ撲滅等、「安心して過ごせる氷見高校社会」に関する意識の向上 生徒意識調査における「安心して過ごせる氷見高校社会」の創造に対する意識率100%	③歯科治療率アップのための働きかけ 歯科治療率 50%以上
方 策	① 「誇りに思える氷見高校社会」をキーワードに、県下一斉による年1回の「さわやか運動」、本校独自による年6回の「氷高さわやかデイ」の取り組みにおいて、挨拶の意義を事前指導し、挨拶の価値を意識させながら実施する。また、生徒会執行部や校風委員及び交通委員が中心となって取り組ませることで、生徒の主体性に基づく、「挨拶の励行」「交通安全（自転車乗車マナー等）」「校内における携帯電話の取り扱いについて」など社会的マナーの向上に努める。 ② 「安心して過ごせる氷見高校社会」をキーワードとして、様々な活動を展開する。具体的には、集会等で「命の尊重」を訴えるとともに、学期ごとに「被害調査」によるアンケートを実施することで、人間関係に関する悩みや問題行動を早期に把握する。さらに、得た情報をもとに、迅速かつ周到に対応する体制を構築する。		③ <ul style="list-style-type: none"> 保護者会の際に歯科治療カードを再度配布し、長期休業中などに治療するように促す。 クラスごとの治療率に差が生じるため、状況を集約して担任にも知らせ、個々の生徒に必要な性を確認し、指導する。 歯の健康に関する掲示物などを作成し、治療を促す。 部活動の大会などが少ない時期を見計らう。また、3年生には大学入試に向けた年間計画を見据えて、タイミングよく治療を促す。
達 成 度	① 社会規範の重要性を意識している生徒の割合98%	② 安心して過ごせる氷見高校社会の創造を意識して生活している生徒の割合90%	③ 歯科治療率 55.4% （冬期休業直後の調査による）
全体的な取組状況	① 年に1回の「高校生さわやか運動」、月の初めの生徒会が主体的に挨拶運動に参加する「氷高さわやかデイ」、年6回の「頭髪・服装検査」を実施し、挨拶、服装に対する意識の向上に努めた。 ② いじめや類する行動については積極的、かつ早急に対応しようとしてその都度「いじめ対策委員会」を設置し、職員間の連携と情報共有を図り、解消に努めた。		未治療の生徒に対する個別指導や生徒保健委員会でのポスター作成において、高校在学時までの治療費が無料になったことも強調し、例年よりも治療率がアップした。年度内の治療完了に向けて指導中である。
評 価	① A 校内外での挨拶・服装等の社会規範に対する生徒の意識は概ね良好であるが、今後は整髪についての対策が課題である。	② C いじめやそれに類する行為には、学校全体の協力体制のもと対応できつつある。	A 予約済みの生徒を加えると7割近くであり、今後も上昇が見込まれる。
学校関係者の意見	地震による避難所対応など、氷見高生としての誇りが生徒の行動に表れていることが評価される。いじめは一件でもあればマイナスなので、教職員一体となった取り組みをお願いしたい。		氷見市では今年度から歯の治療についても無償となっており、それをPRしてさらに改善してほしい。
次年度へ向けての課題	① 社会規範の遵守に加え、氷見高校生の誇りをもって主体的に行動する心の啓蒙の在り方を検討する。 ② 生徒が安心して学習その他の活動に取り組むことができるよう、いじめの防止・解消等の対策を検討する。		③部活動や大学入試を理由にして後回しにする傾向があるので、タイミングを見ながら個別指導を行う。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：あまり達成しなかった D：達成しなかった)

令和5年度 氷見高等学校アクションプラン - 3 -

重点項目	進路支援（生徒の進路実現に向けた進路指導）	
重点課題	進路意識・知識の強化と組織的な進路指導力向上の取り組み	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・進路実現の過程は複雑であり、職業や上級学校についての理解度や、進路決定の方策（入学試験、就職試験など）に対する基礎的、基本的な知識量に課題がある。進路学習等、進路実現に向けた生徒の主体的な活動ペースを向上させる必要がある。昨年度進路指導部から取組に対する適切な助言ができなかったため、オープンキャンパスへの参加率が低かった。 ・1～2学年の全体的な進路学習の機会は、タイトなスケジュールの中で限られている。生徒自身が進路について継続的に考え、職業や「なりたい自分」について話をする雰囲気醸成する必要がある。高い志を持って進路実現に挑戦する生徒を育成する体制強化が重要であり、面接指導やホームルームの活用が求められる。 ・3学年は、9月の就職試験から3月の国公立大学後期日程まで7か月にわたる多様な受験を指導・サポートする。5学科それぞれの特性と個々の生徒が培ってきた様々な学力が、進路選択と受験にメリットとなるよう、学年、教科、各部署との連携をより密にする必要がある。 ・面談技術や受験情報の収集・提示方法、保護者との連携など、進路指導のノウハウを蓄積・向上させる体制の充実を図る必要がある。 	
達成目標	① 進路実現の手立てについて、生徒の理解と主体的な行動の促進	② 進路関連行事や個人面接等の充実と進路意識の高揚
	<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事以外の大学等見学、企業見学やオープンキャンパスへの参加率（オンライン参加含む） 1 学年 = 30% 以上、2 学年 = 50% 以上 3 学年 = 75% 以上 	<ul style="list-style-type: none"> ・進路統一ホームルームや大学等見学の満足度 70% 以上 ・生徒が感じる面接等の満足度 80% 以上
	③ 進路希望の実現（第3学年 進学希望者）	④ 進路希望の実現（第3学年 就職希望者）
	<ul style="list-style-type: none"> ・3年9月進路希望調査(校種)に対し 普通科：第一志望達成率 80% 専門学科：第一志望達成率 90% 	<ul style="list-style-type: none"> ・就職希望者の就職内定率 100%
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ・キャリア学習と進路の手立てを知る機会を設けるなど、各学年に応じた計画的な進路指導を行うことで、早期に自己の適性の理解及び将来設計を具体化させ、意欲的に学習ができるように指導する ・進路に関するホームルームを実施し、より効果的な系統指導プログラムを作成して、学年全体での計画的な指導体制の共有化を図る（進路統一ホームルームを年3回程度実施） ・各学年と連携し、3年間を見通した進路指導を行う。 1 年次・・・「進路講話」「職業人から学ぶ」「文理選択」「進路ガイダンス」「卒業生と語る会」他 2 年次・・・「大学等見学」「修学旅行（班別研修）」「学部学科の研究」「卒業生と語る会」「インターシップ」他 3 年次・・・「進路ガイダンス」「オープンキャンパス」「就職説明会」「企業見学」「進学検討会」他 ・「面接重点期間」をおおむね学期ごとに設定し、複数教員で情報共有を図る体制を推奨、実践する。 ・学力と進路情報について校内ネットワークを利用し、教員間で共有する。生徒への情報提供やアンケート調査等を行うとともに保護者への情報提供をより進める。 	
達成度	① アンケート「企業見学・オープンキャンパス（オンライン含む）に参加したか」	② 学校生活アンケート
	<ul style="list-style-type: none"> 普通科 1年=20% 2年=90% 3年=60% 専門学科 1年= 2% 2年=46% 3年=84% 全体 1年= 9% 2年=68% 3年=72% 	<ul style="list-style-type: none"> 「ホームルームなど進路行事を通して的確な進路情報が得られているか」 普通科 1年=91% 2年=87% 3年=98% 専門学科 1年=80% 2年=80% 3年=90% 「進路を決める上で担任との面接は役に立っているか」 普通科 1年=91% 2年=91% 3年=92% 専門学科 1年=64% 2年=80% 3年=96%
具体的な取組状況	③ 普通科：第一志望達成率95.7% 専門学科：第一志望達成率96.1%	④ 就職希望者46名全員内定
	① 1年生は具体的な上級学校、職種が具現化されておらず進路指導部から取組に対する適切な助言が必要であった。	② 1年専門学科での担任との進路面接に対して進路指導部・学年からの助言が必要であった。
評 価	③ 進路希望の実現 国公立大学合格者25名で昨年度より5名増	④ 就職希望者は、公務員も含め全員第一希望どおり内定を得た。
	① 1年 D、2年 A、3年 C	② 1年専門 C 他はA
学校関係者の意見	③ 普通科：A 専門学科：A	④ A
	学校全体として進路指導に取り組む体制は高く評価できる。大学では、キャリアカルテを作成し、一人の学生のキャリア希望やキャリア履歴などを共有する仕組みがあるが、そのような仕組みも参照して、一人の生徒を複数の教員でサポートする体制づくりを一層、進めてほしい。	
次年度へ向けての課題	進路指導部が主体となり、キャリア教育をより充実させることが重要である。進学においては推薦入試での生徒の適性を見極め、アドバイスをする必要がある。就職についても本人の適性、就職後の持続性等を生徒自身が判断していけるように努めたい。	

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：あまり達成しなかった D：達成しなかった)

令和5年度 氷見高等学校アクションプラン - 4 -

重点項目	特別活動		
重点課題	コロナの行動制限緩和での学校行事・部活動及び地域連携活動の活性化		
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 学校行事は、コロナの行動制限緩和により、行動制限前の内容での実施が予想される。生徒中心で、参加意識や達成感を感じることができるよう企画・運営を、生徒会執行部や生徒の意見を取り入れながら実施したい。 部活動は、全校生徒の約85%が加入しており、生徒の自己肯定感の向上に大いに寄与している。大声で応援しないなどの行動制限はあるが、練習試合等は可能な状況にある。生徒が前向きになれるような活動計画が求められる。 コロナ禍で自粛してきたボランティア活動を再開する動きが目立つ。地域と連携した美化活動の計画やボランティア推進委員会を中心に家庭クラブやJRC部等とも連携し、ボランティア活動に参加する生徒を増やしていきたい。 		
達成目標	① 各学校行事の内容の充実	② 部活動に参加することで自己肯定感を高める生徒の増加	③ SDGsに基づくボランティア活動への参加意識の高揚
	各行事に対する生徒の満足度 90%以上	3 学年生徒の満足度 80%以上	美化活動、環境保全活動、募金活動への全校生徒の意欲的参加
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ① 各行事の前に各種委員会の開催や生徒会便りの発行を行い、行事についての実施要項等を周知していく。また、行事後にアンケートを行うことで、生徒の達成感が高まるよう改善点を加え、次年度に活かすよう工夫する。 ② 部活動で人間性の向上を図ることの大切さを全校生徒に意識させつつ、メリハリのある取り組みを促す。3年生に、アンケートで部活動に対する意識調査を行い、結果を各部顧問に知らせ、前向きになれるよう支援活動に生かす。 ③ ボランティア推進委員会を中心に、SDGsを意識したボランティア活動のポスターの掲示や放送などを通して、全校生徒に積極的な参加を呼びかけるとともに、ボランティア後の記録や感想を残すなど振り返りの機会を設ける。 		
達 成 度	① 各行事に対する満足度 94% 1年93% 2年91% 3年95%	③ 他団体との活動、地域の美化活動参加 37% 1年36% 2年34% 3年40%	
	② 部活動に対する満足度（3年対象） 95% (加入率79%に対する満足度)	エコキャップ・コンタクトレンズケースの回収、募金活動、書き損じはがきの回収、オレンジボン運動は実施。氷見ユネスコ協会・氷見市身体障害者協会・こども食堂と連携。	
具体的な取組状況	すべての行事で生徒会執行部が主導し、体育大会では、コロナ禍前の競技を復活させた。氷高祭についても、調理による模擬店を復活させた。また、来校者を制限をせず実施することもできた。部活動では、多彩な部活動を運営できるよう顧問の配置、予算運用等適正に対応した。		
評 価	① A 体育大会や氷高祭について、コロナ禍前の内容に近い形で実施できた。満足度は非常に高い。	③ B ボランティア活動がかなりコロナ禍前に戻ってきている。他団体との活動、地域の美化活動の参加を促したい。 (昨年度参加率22%)	
	② A 引退した生徒の満足度は高い。生徒会アンケートの結果(充実度、理由、改善要望)を顧問に知らせていく。		
学校関係者の意見	報道などから本校の部活動の活躍ぶりは目を見張るものがある。高校生の頑張りは、社会を明るく元気にする側面もあり、引き続きの活躍を期待している。コロナ禍が収束に向かい学校行事も充実してきているが、生徒にとっては学校生活への大きなモチベーションとなるものであり、さらなる充実を努めてほしい。		
次年度へ向けての課題	コロナ禍前の企画、運営で学校行事を運営できた。部活動においても練習試合、県外遠征を制限なく実施し、公式大会に臨むことができた。学校生活において、生徒たちのモチベーションの向上がみられた。ボランティア活動においても積極的参加があった。今後もより多くの生徒が自主的、積極的に学校行事、部活動、ボランティアに参加できるよう企画や運営方法を工夫していく。		

(評価基準 A : 達成した B : ほぼ達成した C : あまり達成しなかった D : 達成しなかった)

令和5年度 氷見高等学校アクションプラン - 5 -

重点項目	その他（情報発信及び家庭との連携）	
重点課題	適切な情報発信及び保護者との情報共有の推進	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 家庭との連携を図るために、PTA活動への積極的な参加を呼びかけている。 PTA定期総会の実施・昨年、総会参加保護者数は、130名（18.4%）とコロナ感染症が減少に移行しても以前の状態には戻っていない現状である。一方、3年専門学科研修会74.1%、3年普通科研修会84.5%とコロナ禍にあっても3学年PTA研修会のニーズは高く、参加率は増加している。 PTAと生徒の懇談会の開催・令和元年度より開催を継続している。昨年度も2回の懇談会を実施し、学校生活や部活動に必要な物品などの要望について話し合い、より充実した学校生活を送ることができるよう予算内で優先順位を協議し整備している。 PTA会報「ゆずるは」の発行…広報委員により年2回の発行を継続している。 体育大会や氷高祭などの学校行事、授業の様子や部活動などの様子を紙面を通じて発信している。 学校と保護者との情報共有手段として、「氷高ほっとメール（安心安全メール）」への登録を保護者に呼びかけている。保護者の「氷高ほっとメール」登録率は高い水準（昨年度は97.1%）で安定している。 	
達成目標	① 新型コロナ対策の行動制限が緩和されていく中で、総会への参加を促す企画の立案、実現。各行事の情報の発信。 <ul style="list-style-type: none"> 定期総会の内容の整理、時間短縮により、有効な時間の活用。 家庭や親子関係などの悩みに答えられる講演内容を精選、提供。 各行事の案内や様子をHPやメールでの発信。PTA会報「ゆずるはの」HP掲載。 参加できなかった保護者に対し、資料の配付にとどまらず、意見や要望の受付窓口を用意。 	② 「氷高ほっとメール」の保護者満足度の向上 <ul style="list-style-type: none"> 「大いに満足している」「概ね満足している」を合わせて90%以上。
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 定期総会の内容の整理し、時間を短縮できるよう進行を工夫する。 家庭や親子関係などの悩みに答えられる講演内容を精選し、提供する。 各行事の案内や活動報告をHPやメールで発信する。PTA会報「ゆずるはの」HP掲載を検討する。 参加できなかった保護者に対し、資料の配付にとどまらず、意見や要望の受付窓口を用意する。 	<ul style="list-style-type: none"> 合格者説明会やPTA入会式等の機会をとらえ、「氷高ほっとメール」の利用価値が大きいことをしっかりと伝え、保護者の登録を促す。 「氷高ほっとメール」の登録をしても設定の不備等により不達の保護者には生徒を通じて案内をする。 1学期末に保護者対象に匿名アンケートを実施し、満足度および要望等を集約するとともに、要望の反映に努める。 3学期中にもう一度同様のアンケートを実施し、結果を集約する。
達 成 度	① 60%	② 95%
具体的な取組状況	① 総会時の講演会の実施 参加者160名（24.4%） 「聴き方で変わる親子関係」吉谷氏 学年別研修会 3年（84.6%） [△] 、2年（53.4%） [→] 、1年（59.1%） [↓] 資料の配付、広報を通しての活動報告 広報（年2回）、学年日より（年4～5回） による行事予定、活動報告、PTAへの働きかけ。	② 7月に行ったアンケートの結果では397件の回答が得られ、「大いに満足している」が59%、「概ね満足している」が36%であった。また「あまり満足していない」「不満が多い」を合わせて5%であった。 主な不満の要因としては、回数が少ない。タイミングが遅い。日程を連絡してほしい。などがあげられた。 また、遅刻欠席等の連絡もメールでできないか。との意見も多くいただき、新たに連絡システムを導入した。
評 価	B	A
	<ul style="list-style-type: none"> 総会では、興味関心を持っていただけの講演会を実施できた。総会を短縮し、効率よく実施できた。同日に開催している3年専門学科の参加者に継続して参加してもらえる内容にしていく必要がある。 参加率が低い1・2学年研修会には、内容や連絡方法など呼びかける方法について工夫が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> 「氷高ほっとメール」の登録者は97%を超え、利用価値に対する理解が得られている。昨年度までは登録率を上げることが目標としてきたが、全学年で高い登録率になったことから、今年度より目標を保護者の満足度に切り替えたことも評価に値する。 満足度についてアンケートでは高い評価をいただいているが、不満を答えにくい保護者もいると思われ、可能な限り善処しなければならない。
学校関係者の意見	<ul style="list-style-type: none"> 今回の結果から保護者はPTA研修など、内容に価値を求めていることが想像される。今後、魅力ある内容への検討が重要となる。 	<ul style="list-style-type: none"> 満足度の向上を目標としたのは良いことである。 満足度のアンケートでは、選択肢は4段階よりも5段階とした方が、より不満を感じる意見を集約しやすいのではないかと。
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> 保護者の参加を促す総会の内容、各議案の承認方法について検討する必要がある。PTA役員の業務削減や出席する会員の負担を減らす書面決議も踏まえての検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 満足度に関するアンケートを今後も継続する。 選択肢の真ん中に「ある程度満足している」を加え、5段階で集約していく。

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：あまり達成しなかった D：達成しなかった）